

生涯学習情報誌

Life Learning

7 2021
Jul.
NO.371



東日本大震災および福島第一原子力発電所事故への 医療支援および放射線啓蒙活動

特定非営利活動法人 医療・健康社会研究所

代表 坪倉正治さん

(医師・福島県立医科大学／南相馬市立総合病院／相馬中央病院)

正しい”を押しつけず被災者の”知りたい”に応える

生涯学習開発財団松田妙子賞は、生涯学習の新たな発展に寄与する個人や起業・団体の活動を顕彰する目的で、昨年度に創設された。第1回の応募・推薦は本年2月14日に締め切られ、審査の結果、表題の医療・健康社会研究所の活動が選ばれた。授与式はコロナウィルス蔓延の影響で延期されているため、まずは誌面にて、同法人代表で医師の坪倉正治さんのインタビューをお届けする。

2011年の東日本大震災発生当時29歳だった坪倉さんは、直後の4月から福島県の相馬、南相馬両市で、被災者の医療支援にあたった。以後現在まで、放射線被ばく検査体制の構築、地域や学校での放射線説明会や授業、放射線の知識啓蒙のための情報発信、継続的な検査データ分析を次世代に活かす取り組みなどを、住民視点で丁寧に行ってきた。

被災地に入り長く活動する理由は？

一言で表すなら「縁」です。指導教授から電話で「南相馬に行けるか？」と打診されてすぐは、彼女（現在の妻）に泣かれるし、少し戸惑いました。一方で、日本の医療問題、解決に寄与したいの思いは以前からあり、「誰かが行かなあかんやろ」と決めたのです。派遣先は南相馬市立総合病院で、主な仕事は避難所を回って、被災者の問診や相談に乗ることです。多くの方が放射線の影響を不安視する裏で、うつ、糖尿病、高血圧などの慢性疾患が悪化していることもわかりました。

一人ずつ真摯に向き合っていたら10年経ったという感じです。私は中1のとき、大阪で阪神淡路大震災を経験し、祖父が体調を崩すのを見ていますので、被災者の不安に思いが至る素地はあったかもしれません。

原発事故の放射線の不安にどう対応？

自分も一から放射線の勉強をしました。特に子供さんへの影響を心配する声は多く、個々の検査が必要と考え、ホールボディカウンタによる内部被ばく検査を推進しました。定期的に体内の放射線量を測定し、一人ずつデータを見ながら相談し、前向きに生活できるよう後押しするのです。並行して少人数の放射線の説明会や学校での授業を始めました。地元の新聞の連載記事で発信もしています。科学的に正しい知識を押し付けるのは、わからない人の切り捨てになりかねません。政府や東電の回し者呼ばわりされる経験も踏まえ、私という人間を信用してもらいながらの活動でした。住民自身が考え偏見や差別に打ち勝つ力を養うことで、災害復興やレジリエンスにつながると考えています。

今後はどのような展開を予定？

今後は、放射線の医療従事者の育成、福島以外の国内外への情報発信や共同研究を予定しています。現在のコロナウィルス感染症もそうですが、見えない恐怖にどう立ち向かうかが、多くの社会問題に共通する点です。正しい知識や情報に基づいて判断できれば、災

害時でも恐怖は緩和できますが、そのためには情報リテラシーの養成も必要です。財団会員の皆さまには、感謝をお伝えするとともに、福島の実状を知っていただき、風評被害などがなくなるよう願っています。

*

本活動は、医師による医療面での社会貢献にとどまらない。正しさを押し付けず自発的な学習意欲を喚起し、学びによって社会課題解決に導いている点、教える側も新たな学びをしている点、得られた知見を地域や次世代へつなげている点などにおいて、松田妙子賞の目的に照らし大いに評価できる。



↑川内村小学校での放射線の授業風景。スクリーンにはホールボディカウンターの写真
→ベテランママの会とともに制作・配布した小冊子『よく分かる放射線教室』

鬼の学び ⑬

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

JAXA、JR東日本、博報堂、ラクスルなど52事業を立ち上げ、この4年間、毎年上場を果たし、上場請負人とも呼ばれている守屋実氏。実務経験を積んだら、あとは「強い意志が最も必要」と説く。そんな守屋氏に、起業のコツを聞いた。

鬼塚 まずは守屋さんの経歴を教えてください。守屋さんって、どんな人なんですか？

守屋 私は1992年に新卒で機械部品専門商社のミスミ（現・ミスミグループ本社）に入社しました。当時では珍しかった新規事業部に配属され、独立後の現在まで30年以上、一貫して新規事業の立ち上げを手掛けています。

鬼塚 30年以上起業一本、まさに「起業のプロ」ですね。これまで幾つぐらいの事業を手がけて来られたのですか？

守屋 いま私は52歳ですが、じつは自分の年齢と同じ数だけ参画してきました。52の事業に参画した、ということですから。内訳を言うと、サラリーマン時代に手がけた企業内起

あらゆる「不」に商機と勝機

業の数が（17）で、独立起業の数が（21）、時間がある時に手伝った週末起業の数が（14）です。合計すると52になります。また、直近4年で4社の上場を果たしています。

鬼塚 計52社！しかも4年で4社の上場とはすごいですね。新規事業と聞くと、若く活気ある現場というイメージですが、実際もそうなのでしょうか？

守屋 たしかに、そういったイメージがあると思います。でも私は新規事業がうまくいく秘訣は、この事業をやりたい！と強く思っている創業者と、その事業に必要な専門家が会おうことだと思っています。年齢を気にすることはあまりないと思います。もちろん1人の中に、この創業者と専門家の両方の人格があればベストですが、なかなかそうはいかない。そういう場合、その分野の専門家が必要なのです。そこは仕事を極めたような年配者の知識、知見が不可欠です。私自身は新規事業の専門家として様々な事業に参画していますが、50代。いい歳です（笑）。

鬼塚 強い意志を持った創業者と専門家との出会いが大切なのですね。これまで関わられた中で、創業者と熟練した職業家タイプの組み合わせだったことはありますか？

シア起業でも革命的製品が生まれたわけ

守屋 あります。難聴の高齢者が、テレビなどの音量を上げなくても聞き取りやすいスピーカーを開発しました。「ミリスピーカー」という商品です。創業者の佐藤和則さんが創業当時57歳。佐藤さんとともに動き出した共同創業者のエンジニアの方は60代でした。

鬼塚 還暦前後の皆さんが起業されたのですか。シアベンチャーですね。そのスピーカーとはどんな商品なんですか？

守屋 じつは、蓄音器の技術に注目してつくられたスピーカーなのです。開発のきっかけはまったくの偶然でした。音楽療法を手がける大学の先生が「耳の遠い高齢者は、通常のオーディオスピーカーよりも蓄音機の方が聞き取りやすい」という記事を新聞に寄稿したんですね。その記事を読んだ佐藤さんは元々技術畑の出身でしたから、「蓄音機は金属管（ラッパの部分）の曲面に秘密があるのでは」とピンときた。そこから試行錯誤を経て、100年の音の歴史を変える商品ができました。構造などの詳細はぜひサイト等で確認していただきたいと思います。100年間変わらなかったスピーカーの形を刷新しただけでなく、聴こえなかった人が聴こえるようになる、という革命的变化を起こした商品なんです。当初は大型で、10万円を超える高額商品でしたが、技術革新で小型化し、値段も3万円を切ることができました。会社はこのコロナ禍において、前年同月比50倍の成長を遂げています。

鬼塚 50倍！ものすごいサクセスストーリーですね。佐藤さんの原動力は一体なんだったのでしょうか。

守屋 佐藤さんがその記事を目にしたのは偶然かもしれませんが、その頃佐藤さんのお父様が難聴になり、楽しみに



守屋 実

1969年生まれ。ミスミの新市場開発室在籍の2002年に、創業者の田口氏と新規事業専門会社エムアウトを創業。2010年に守屋実事務所を設立し新規事業創出の専門家として活動。計52の起業に参画。



●「起業は意志が10割」（講談社）



していたテレビの番組が聞こえづらくなっていたそうです。音量はどんどん大きくなり、家族も大変になってくる。そんな状況をなんとか解決したい。そういう気持ちの底にあったんだと思います。だからその記事を見落とさなかつたし、開発にも活用することができた。そして、じつは、その思い、事業を成長へと牽引したのは、佐藤さんのあとを継いだ現社長の山地浩さんでした。山地さんは、数々の会社を経営してきたプロ経営者で50代の方です。佐藤さんが生み、山地さんが育てた、二人の思いのリレーで、ミライスピー力は成り立っています。

鬼塚 二人の「思い」が、いまだ皆さんの方を助けているんですね。なんだか胸が熱くなります。ですが、コロナ禍においてこれだけの成功をおさめる起業というのは難しいのではないのでしょうか？

守屋 いえいえ、むしろ新型コロナウイルス感染症により、誰もが起業で成功できる時代が到来したと思っています。

● 著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書:『風の色』（講談社）2018年映画化。『花戦さ』（角川書店）2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』（ポプラ社）2007年映画化。『カルテット!』（河出書房新社）2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』（河出書房新社）2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』（河出書房新社）、『僕たちのプレイボール』（幻冬舎）2012年映画化など多数。



突然強いられた新たな生活様式の中で、不便を感じたり悩みを抱えていたりする人は多いでしょう？ 事業は顧客がいてこそ成立します。新たなニーズを持った顧客がこれまでの歴史の中では見られないほどたくさん生まれた今は、歴史上見られないほどにたくさんの新たな事業が求められている時期でもあるのです。

鬼塚 たしかに、新型コロナウイルスが流行し始めてもう一年以上が経ち、新しい商品やサービスがいくつも登場しましたね。ですが、それでもまだ、私生活においてもビジネスにおいても、さまざまな種類の不便や不足が溢れています。まだ機会はありますか？

信念を持つ課題解決に挑む人が未来を拓く

守屋 今の時代の起業は、その「不」の解決競争になります。不便、不足、不利益……あらゆる「不」が全世界前世代同時多発的に起きていますが、「不」が生まれたということとは、必ずそこに商機と商機が発生するということです。語弊を恐れずに言うならば、むしろ今は「チャンス時代」だと言えます。誰よりも早く「不」に気づき、その解決に挑むアイデアを出し、そして実行に移す。そんな「意志あるスピード」がものをいいます。企画や計画を机上でじっくり練ったうえでの勝負というよりは、気づきを素早く行動に移すことによる勝負です。しかも現代は、オンライン

ンで呼びかけて人材を集められるなど、事業に必要なツールを簡単に手にできる時代です。そういった意味で、誰もが起業で成功できる時代と言える、と考えています。

鬼塚 身近に転がる「不」を見逃さずに拾い上げ、素早く動き出すことが肝要なんですね。

守屋 そういうことです。今の状況についてただただ「どうしよう」と騒いだり、「嫌だなあ、はやく元に戻ればいいのに」と愚痴を言うだけの傍観者で居続けていては、やっぱりこの競争には勝てません。言うまでもないことではありますが、既存の商品やサービスのほとんどは「フォロワー」時代の産物です。したがって、新しい生活に対応できず、たくさん「不」が発生するのは当然ともいえるわけです。たとえば、マイク付きイヤホン。いい音で音楽を聴くには適していますが、雑音をカットして打ち合わせするには向きません。これはそもそも、今ほど盛んにオンラインミーティングがこなわれていなかった時代に作られた商品だからです。こういった「不」の解決にトライするのがこれからの新規事業です。既存の価値観が覆った今こそ、「新たな事業の力」が必要となります。誰かの起業によって、「コロナ禍で浮き彫りになった多くの社会問題や「不」を解決できる可能性がある。私はそんな誰かの背中を全力で押したいと思っています。

鬼塚 本日は熱いお話をありがとうございました。最後に、読者へ一言お願いします。

守屋 繰り返すようですが、現在誰もが商機と商機をつかむ可能性を持っています。そして、生活する日常の中で、「不」は簡単に発見することができます。これだけの機会を目の前にしながら、挑戦しないなんてもったいない。行動したものの勝ち。年齢とか性別とか関係ない。誰でも、いくつになっても、成功は常にそばにあり、それを活かすも殺すも自分次第。「挑戦したい」「この問題を解決したい」という思いがあるのなら、その意志を強く持つて、ぜひ踏み出してほしい。そうした人が、混沌の中で未来を切り拓くのですから。

第2回 募集中

生涯学習開発財団 松田妙子賞

Share Your Happiness!

「生涯学習開発財団 松田妙子賞」は、
「生涯学習」の新たな発展に寄与する個人や企業・団体を顕彰し、
その活動内容および「生涯学習」の意義を広く社会に知らしめる目的で、
2020年に創設しました。

松田妙子賞創設の背景



生涯学習開発財団の前理事長 松田妙子は、1983年の財団設立以来約40年近くにわたり、「生涯学習」推進のため、資格認定団体の後援や50歳以上の博士号取得支援など、さまざまな活動を行ってきました。

賞のテーマである「Share Your Happiness」は、大叔父の大森兵蔵、父の松田竹千代を通して松田家に受け継がれてきた「自分が恵まれていると思ったら世の中に恩返しをなさい」というスピリットにもとづいており、松田妙子前理事長が大切にしていた社会貢献の願いが込められています。

松田妙子前理事長は26歳で単身渡米し、帰国後は戦後日本のイメージを回復しようと日本初のPR会社を設立し、日本の住宅品質改善のために日本ホームズや住宅産業研修財団を創設しました。生涯学習開発財団では長寿社会を見越した生き方を提言し、自身も71歳で東京大学博士号（工学）を取得、その研究は大工育成塾創設につながりました。自らが

生涯学習のロールモデルとなり、2019年に亡くなるまで生涯現役を貫きました。

本賞が、松田妙子の「学び続けることが、個人も社会も豊かにする」という意思を受け継ぎ、より良い社会に寄与することを目指しています。

正賞・副賞

正賞：記念品

副賞：賞金100万円

応募方法

指定の申請書による

（財団WEBサイトよりダウンロードできます）

スケジュール

募集締切：2021年10月13日必着

決 定：2021年12月

表 彰 式：2022年1月末予定

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人 生涯学習開発財団 事務局

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-20 虎ノ門実業会館9階 TEL 03-3508-4551

募集要項・申請書は <http://www.gllc.or.jp> E-mail gllc@gllc.or.jp